

「2015年インドネシア大学スプリングスクールプログラム参加報告書」

京都大学理学部1年 牟禮あゆみ

私が今回このプログラムに参加したのは、日本と全く異なる土地での人々の生活や習慣、文化を見たいと思ったからだ。今回初めて非英語圏、東南アジア、そして発展途上国であるインドネシアを訪れて、多くの貴重な体験ができた。

このプログラムでは、大学での授業としてインドネシア語講座の受講と日本学科の授業の聴講を行い、それ以外の活動としては日本学科の学生との共同発表を行った。

インドネシア語講座では、基礎的なインドネシア語の単語や表現を学び、簡単な会話練習を行った。具体的には、状況に応じた挨拶と自己紹介、物のある位置の説明、店での値切り方等だ。ここで学んだ表現は、現地の人々との交流や買い物をするときなどに実際に利用できるものが多く、身につけた知識をすぐに活用することができた。しかし、やはり片言では表現できることが非常に限られており、インドネシア語を使えば使うほど、もっと多くの単語を習得したいと思うようになった。これからもインドネシア語の勉強は続けていきたい。

日本語学科の授業のうち今回聴講したのはシンタクス、社会文化理論から見た日本、現代日本史の三つで、これらの授業を受ける中で、日本について新たな視点から考えることができた。たとえば、大日本帝国によるインドネシア占領による影響の中には、教育の普及や社会の組織化、独立運動の活発化など、良いものもあったという意見を聞いたことで、こういった歴史を良いもの、悪いものに二極化して考えることの問題性と限界を感じた。

現地の学生との共同発表では、京都大学生、インドネシア大学生の混合グループによるプレゼンテーションを準備し、最終日に発表した。私たちの班では日本、インドネシア両国のゴミ問題をテーマとして取り上げ、Jabodetabekへの日本のリサイクルショップチェーン店の進出可能性という観点から考察した。インドネシア大学生との都合がなかなか合わず、限られた時間の中での準備となったが、この発表を通してお互い、相手の国についてはもちろん、自分の国についても理解を深められたと思う。また、他の班の発表を聞く中でも、自国について学ぶことが多くあった。このような機会は日本でも普段なかなか得られないので、今回このような共同発表を行ったことは非常によい経験となった。

また、休日にはインドネシア大学生と共にインドネシア各地の伝統的な家を再現した公園と、オランダ占領時代の町を訪れた。インドネシア各地における文化と生活用品を見て、それらについて学ぶ中で、占領時代を経てインドネシアというひとつの国にまとまった現在も、各民族の人々が自分たちの文化を保持し続けているということに驚きを覚えた。このような、「インドネシア文化」という言葉ではまとめきれないほど多様な文化について、渡航前にはあまり深く考えたことがなかったが、実際に見てみると、なぜここまで多くの異なる文化が生まれたのか、また、各文化どうしの関連性はどの程度あるのか、などの疑問がわいてきた。今回のプログラムではこういったことについてあまり多くを知る機会がなかったが、これから自分なりに学んでいけたらと思う。

今回インドネシアで2週間過ごす中で、こういったインドネシアの興味深い点も数多く見つかったが、他方で、問題点もいくつも目についた。そのうち最も気になったのが大気汚染だ。大都市のジャカルタでは大気汚染が酷いだろうということは予想していたが、デポックでも大通りに行くと一気に空気が変わる気がするほど空気が汚染されている。景色は心なしか霞んでおり、道を歩く人の数人にひとりにはマスクをしている。もちろん、発展途上国のこういった現状について聞いたことがなかったわけではないが、実際に自分の目で見てみると、その深刻性は予想していた以上だった。こういった問題を解決するためにも、有害ガスを排出しない燃料電池等の更なる開発、そして低価格化の必要性を感じた。このような分野は私にとってあまりなじみがなく、どちらかと言えば避けてきたということもあったが、今回の経験で、幅広い分野について知識を持つことの重要性に気づけた。今後は、特定の分野にこだわらず、様々な分野について学んでいきたい。

今回のプログラムに参加して、他国について理解するためには、実際に現地へ赴いて自分の目で見るということが重要であるということ、また、他国を理解することが、自国を客観的に見直すきっかけとなるということに改めて感じた。今後も、このような機会があれば積極的に参加し、世界の様々な国や地域について理解を深めていこうと思う。